

多神教

泉鏡花

青空文庫

場所
名

美濃、三河の国境。山中の社——奥の院。

白寮権現、媛神。(はたち余に見ゆ)神

職。(榛貞臣。修験の出)禰宜。(布

気田五郎次)老いたる禰宜。雑役の仕丁。

(棚村久内)二十五座の太鼓の男。メ太

鼓の男。笛の男。おかめの面の男。道化の面

の男。般若の面の男。後見一人。お沢。(或

男の妾、二十五、六)天狗。(丁々坊)巫女。

(五十ばかり)道成寺の白拍子に扮したる

俳優。一ツ目小僧の童男童女。村の児五、六

人。

禰宜 (略装にて) いや、これこれ (中 啓を挙げて、二十五
 座の一連に呼掛く) 大分日もかげつて参つた。いずれも一休
 みさつしやるが可いぞ。

この言葉のうち、神樂の面々、踊の手を休め、従つて囃
 子静まる。一連皆素朴なる山家人、装束をつけず、
 面のみなり。——落葉散りしき、尾花むら生いたる中に、
 道化の面、おかめ、般若など、居ならび、立添い、意
 味なき身ぶりをしたるを留む。おのおのその面をはずす、
 年は三十より四十ばかり。後見最も年配なり。

後見　こりや、へい、……神かんぬし様。

道化の面の男　お喧やかましいこんでござりますよ。

×太鼓の男　稽けい古中のお神樂で、へい、囃はやし子ばかりでも、大抵

むらかた

村方むらかたは浮かれ上あがつておりますだに、面や装束をつけましては、

媪おば、媽かか々々までも、仕事かせ稼かせぎは、へい、手につきましねえ。

笛の男　明後あさって日あさってげいから、お社やしろの御祭礼ごで、羽目はめさはずいて遊び

ますだで、刈入かりいれどき時の日は短みじけえ、それでは氣の毒と存じまして、

はあ、これへ出合いましたでござえますがな。

般若の面の男　見よう見真みまね似にの、から猿踊ざるりで、はい、一向いっこうに

これ、馴なれませぬものだでな、ちよつくらばかり面をつけて見

ますりようけん了ところ見ところの処ところ……根そまつからお鹿末ごちそうな御馳走なますを、とろろも

も打ちまけました。ついお囃子に浮かれ出して、お社の神様、さぞお見苦しい事でがんしよとな、はい、はい。

禰宜 ああ、いやいや、さような斟酌には決して及ばぬ。料理方が摺鉢俎板を引くりかえしたとは違うでの、催もの楽屋はまた一興じゃよ。時に日もかげつて参つたし、大分寒うもなつて来た。——おお沢山な赤蜻蛉じゃ、このちらちらむらむらと飛散る処へ薄日の射すのが、……あれから見ると、近間ではあるが、もみじに雨の降るように、こう薄りと光つてな夕日に時雨が来た風情じゃ。朝夕存じながら、さても、しんと森は深い。(樹立を仰いで) いずれも濡れよう、すぐにまた晴の役者衆じゃ。些と休まつしやれ。御酒のお流れを

一つ進じよう。神職のことづけじや、一いっしょ所に、あれへ参られ
い。

後見 なあよ。

太鼓の男 おおよ。(言い交かす。)

道化の面の男 かえつておぞうさとは思うけんどが。

笛の男 されば。

おかめの面の男 御ご挨拶あいさつべい、かたがただで。(いずれも面を、

楽しげに、あるいは背、あるいは胸にかけたるまま。)

後見 はい、お供して参りますで。

禰宜 さあさあ、これ。——いや、小兒衆こどもしゆ——(渠かれら幼きが女

の児こ二人、男の子三人にて、はじめより神楽を見て立つ)——

一遊び遊んだら、暮れぬ間に帰らつしやい。

後見 これ、立たちい巖いわにも、一いっ本ほん橋ばしにも、えつと気をつきようぞ

よ。

小児一 ああ。

かくて社家しゃけの方かた、樹立こだちに入る。もみじに松まじを交う。社家
は見えず。

小児二 や、だいぶ散らかした。

小児三 そうだなあ。

小児一 よこれやしないやい、木きの葉はだい。

小児二 木の葉でも散らばった、でよう。

女児一 もみじでも、やっぱり掃くの？

女児二 莫塵ごごの上に散つていれば、内でもお掃除そうじするわ。

女児一 神様のいらつしやる処よ、きれいにして行きましよう。

女児二 お縁は綺麗きれいよ。

小児一 じゃあ、階段だんだんから。おい、箒ほうきの足りないものは手で引ひ

掻つかけ。

女児一 わたしたもと私は袂たもとにするの。

小児二 乱暴らんぼうだなあ、女のくせに。

女児三 だって、真紅まっかなのだの、黄色い銀杏いちようだの、故わざとだって
ふところ

懐いへさ、入いれる事よ。

折れたる熊手くまで、新あたらしきまた古ふる箒ほうきを手てん手に引ひ出し、
落葉おちばを掻かき寄せかきよ掻集かめ、かつ掃かきつつ口くち々に唄うたう。

「お正月は何処まで、

からから山の下まで、

土産は何じや。

櫃や、勝栗、蜜柑、柑子、橘。……

お沢（向つて左の方、真暗に茂れる深き古杉の樹立の中より、

青味の勝ちたる縞の小袖、浅葱の半襟、黒縹子の丸帯、

髪は丸鬘。鬢やや乱れ、うつくしき佛に窶れの色見ゆ。素足

草履穿にて、その淡き姿を躡わし、静に出でて、就中杉

の巨木の幹に凭りつつ——間。——小児らの中に出づ）まあ、

いいお見ね、媛神様のお庭の掃除をして、どんなにお喜びだ

か知れませんか——姉さん……（寂く微笑む）あの、小母さんが

ね、ほんの心ばかりの御褒美ごほうびをあげましょう。一度お供物くもつにしたのですよ。さあ、お菓子。

小児こどもら、居いわ分わかれて、しげしげみまも瞻るる。

お沢 さあ、めしあがれ。

小児一 持って行くゆの。

女児一 頂ういて帰かるの。(皆みないたいけに押おしいただ頂だく。)

お沢 まあ。何な故ぜね。

女児二 でも神様が下くださるんですもの。

お沢 ああ、勿も体たいない。私わはたしさんはお三さんどんだよ、箒はを一つ貸かして頂ち戴だい。
戴だい。

小児二 じゃあ、おつかい姫だ。

女児一　きれいな姉さん^{ねえ}。

女児二　こわいよう。

小児一　そんな事いうと、学校で笑われるぜ。

女児一　だって、きれいな小母さん^{おぼ}。

女児二　こわいよう。

小児二　少しこわいなあ。

いい次ぎつつ、お沢^{さわ}の落葉を搔寄^{かきよ}する間に、少しずつや
や退^{すさ}る。

小児一　お正月かも知れないぜ。この山まで来たんだ。

小児二　や、お正月は女か。

小児三　知らない。

小児一 きつね 狐だと大変だなあ。

小児二 そうすりやこのお菓子なんか、家へ帰ると、櫃や勝栗だ。

小児三 そんなら可いけれど、皆木の葉だ。

女の児たち きやあ——

男の児たち やあ、転ぶない。弱虫やい。——（かくて森蔭に

かくれ去る。）

お沢 （箒を堂の縁えん下に差置き、御手洗みたらしにて水を掬すくい、鬢搔撫かみかきな

で、清き半巾ハンケチを袂たもとにし、階段の下に、少時しばしぬかずき拜む。静

寂。きりきりきり、はたり。何処どこともなく機織はたおりの音聞こゆ。

きりきりきり、はたり。——お沢。面おもてを上げ、四辺あたりをみまわし耳を

澄ましつつ、やがて階段に斜ななめに腰打掛うちかく。なお耳を傾け傾け、

きりきりきり、はたり。間調子まぢようしに合わせて、その段の欄干を、

軽く手を打ちて、機織の真似し、次第ききほに聞惚れ、うつとりとな

り、おくれ毛げはらはらとうなだれつつ仮睡いねむる。）

仕丁（揚幕あげまくの裡うちにて——突拍子とつびようしなる猿さるの聲）きやツきやツ

きやツ。（乃すなわち面つらな長ながき老猿ふるざるの面かぶを被かり、水すい干かん烏帽えぼし子こ、事

触とぶれに似なりたる態なりにて——大根だいこん、牛蒡ごぼう、太人參ふとにんじん、大おお燕かぶら。

棒鱈ぼうだら乾から鮭さけ堆ずたか、片荷かたにに酒樽さかだるを積たみたる蘆毛あしげの駒こまの、紫むらな

る古手綱ふるたづなを曳ひいて出いづ）きやツ、きやツ、きやツ、おきやツ、

きやア——まさるめでとうつかまつのう仕つかまつる、踊おどるが手もと立廻たちまわり、肩

に小腰こしをゆすり合あわせ、と、ああふらりふらりとすする。きやツ

きやツきやツきやツ。あはははは。お馬丁べつとうは小腰こしをゆするが、

蘆毛よ。あしげ（振向く）お厩うまやが近うなつて、和わどのの足はいよいよ
 健かに軽いなあ。この裏坂うらざかを帰らいでも、正面の石段、一飛
 びつばさに翼の生じた勢いきおいじや。ほう、馬に翼が生はえて見い。われらに
 尻尾しっぽがぶら下る……きやツきやツきやツ。いや化ばけの皮の頭われ
 ぬうちに、いま一いつこん献けんきこしめそう。待て、待て。（馬柄杓まびしやく
 を抜取る）この世の中に、馬柄杓などを何なんで持つ。それ、それ
 このためじや。（酒を酌くむ）とととと。（かつ面を脱ぐ）お
 つとあるわい。きやツきやツきやツ。仕丁しちようめが酒を私わたくしすると
 あつては、御前おんまえ様、御機嫌ごきげんむずかしかろう。猿が業わざと御覧ごらんず
 れば仔細しさいない。途みちすがらも、度々たびたびの頂ちようだい戴だいゆえに、猿の面
 も被かつたまま、脱いでは飲み被かつては飲み、質しちの出入だしいれの忙せわし

い酒じやな。あはははは。おおお、たつくち竜の口しみずの清水より、馬の
 背の酒は格別じや、甘露甘露。(舌したつづみ 鼓うつ) たつたつたつ、
 甘露甘露。きやツきやツきやツ。はて、もう御前おんまえに近い。も
 一度馬柄杓でもあるまいし、猿にも及ぶまい。(とろりと酔え
 る目に、あなたに、きざはし階なるお沢の姿を見る。あわただ慌しくまうつむけ
 に平伏ひれふす) ははッ、だいごんげん大権現様、御免なされ下さりませ、御免
 なされ下さりませ。あらたか靈験な御姿おすがたに対しおそれ恐多おほい。今やな
 ぞ申しましたる儀は、全くたわごと譫言にござります。猿の面を被り
 ましたも、唯わたくしおみきを私しよう、不届ふとどきばかりではござりませ
 ぬ、貴女様御祭礼の前日夕、うまやお厩の蘆毛を猿ひが曳いて、さとかた里方
 を一巡いたしますると、それがそのままに風雨順調、五穀じょう成

就、百難皆除の御神符となります段を、氏子中申伝え、
 これが吉例にござりまして、従つて、海つもの山つものの献
 上を、は、はッ、御覧の如く清らかに仕りまする儀でござりま
 して、偏にこれ、貴女様御威徳にござります。お底を蒙ります
 る嬉しさの余り、ついたべ酔いまして、申訳もござりませ
 ぬ。真平御免され下されまし。ははッ、（恐る恐る地につけ
 たる額を擡ぐ。お沢。うとうととしたるまま、しなやかに膝を
 かえ身動きす。長襦袢の浅葱の裓、しつとりと幽に媚めく）
 それへ、唯今それへ参ります。恐れ恐れ。ああ、恐れ。それ
 以て、烏帽子きた人の屑とも思召さず、面の赤い畜生と
 お見許し願わしう、はッ、恐れ、恐れ。（再び猿の面を被りつ

つも進み得ず、馬の腹に添い身を屈め、神前を差覗く。蘆毛
 よ、先へ立てよ。貴女様み気色けしきふるに触る時は、矢の如く鬢櫛びんぐしを
 お投げ遊ばし、片目をお潰つぶし遊ばすが神罰と承る。恐れ恐れ。
 (手綱を放たれたる蘆毛は、頓とんじやく着つなく衝と進む。仕丁は、
 ひよこひよここと従い続く。舞台やがて正面にて、蘆毛は一気に
 厩うまやかたの方、右手もみじの中にかくる。この一氣に、尾の煽あおりをくら
 える如く、仕丁、ハタと躓つまずき四よつに這はい、面を落す。慌あわふてて懐
 に捻ねじこ込む時、間近まぢかにお沢を見て、ハツと身を退すきりながら凝じつと再
 び見直す)何なんじや、人か、参詣さんけいのものか。はて、可惜あつたら二つ
 ない肝きもを潰つぶした。ほう、町方まちかたの。……艶つやつや々と媚なまめいた婦おんなじ
 やが、ええ、驚かしおった、おのれ！ しかも、のうのうと居い

睡ねむりくさつて、何どこ処こに、馬うまの通とおるを知らぬ婦めかけがあるものか、野の
 放ほう凶げうな奴やつめが。——いやいや、御み堂どう、御み社じやに、参さん籠ろう、通つ夜や
 のものの、うたたねするは、神かみの御おつげのある折せじやと申まをす。
 神慮かみしりのほども畏かしこい。……眠ねむりを驚おどかしてはなるまいぞ。(抜ぬき足あし
 に社かみ前まへを横よこぎる時とき、お沢さわ。うつつに膝ひざを直たださんとする懐い中さかより、
 一ち挺ようの鉄かね槌づちハタと落おつ。カタンと鳴なる。仕し丁ぢやう。この聊いの音さかに
 も驚おどきたる状さまして、足あしを爪つ立ただてつつ熟じつと見みて、わなわなと身みぶ
 るいするとともに、足あし疾しばに樹こ立だちに飛と入びいる。間ま。——懐かい紙しの端はし
 乱みだれて、お沢さわの白むなき胸むなさきより五ご寸すん釘くぎ。パパラリと落おつ。)

白はく寮りよう権こん現げんの神かみ職しやくを真ま先さきに、禰ね宜ぎ。村むら人びと一同いどう。仕し

丁ぢやう続ぞくいて出いづ——神かみ職しやく、年ねん四し十じゆばかり、色いろ白しろく肥ふえて、

鼻下びかに髯ひげあり。落ちたる鉄槌を奪うと斉ひとしく、お沢の肩を掴つかむ。

神職　これ、婦おんな。

お沢　（声の下に驚さき覚め、身を免のがれんとして、階前には衆の林立せるに遁にげ場を失い、神職の手を振りもぎりながら）御免なさい
 いまし、御免なさいまし。（一度階きざをのぼりに、廻廊の左へ遁ぐ。人々は縁えん下より、ばらばらとその行く方ほうを取巻く。お沢遁げつつ引返ひきかえすを、神職、追状おいざまに引違ひきちがえ、帯際ぎわをむずと取る。ずるずる黒縹くろしゆす子の解くるを取つて棄て、引据ひきすえ、お沢の両手をもて犇ひしと蔽おおう乱れたる胸に、岸破がばと手を差入さしいれる）あれ、あれえ。

神職 (発き出したる形代の藁人形に、すすくと釘の刺りたるを片手に高く、片手に鉄槌を翳すと斉しく、威丈高に突立上り、お沢の弱腰を と蹴る) 汚らわしいぞ！ 罰当

お沢 あ。(階を転び落つ。)

神職 鬼畜、人外、沙汰の限りの所業をいたす。

禰宜 いや何とも……この頃の三晩四晩、夜ふけ小ふけに、この

方角……あの森の奥に当つて、化鳥の叫ぶような声がします

るで、話に聞く、咒詛の釘かとも思いました。なれど、場所柄

ゆえの僻耳で、今の時節に丑の刻 参などは現にもない事

と、聞き流しておつたじやが、何と先ず……この雌鬼を、夜

叉しやを、眼前に見る事わい。それそれ俯向うつむいた頬骨ほおほねがガツキと
 尖とがつて、頤あごは嘴くちばしのように三角形なりに、口は耳まで真赤まっかに裂けて、
 色はなも縹なだいろになつて来た。

般若の面の男 （希有けうなる顔して）禰宜様や、私わしらが事をおつし
 やるやずららか。

禰宜 気けもない事、この女夜叉によやしやの悪相あくそうじや。

般若の面の男 ほう。

道化の面の男 （うそうそと前いに出いづ）何と、あの、打込む太鼓
 ……

太鼓の男 何じやい。何じやい。

道化の面 いや、太鼓ではない。打込む、それよ、カーンカーン

と五寸釘……あの可おそろし恐い、藁の人形に五寸釘ちゆうは、はあ、

その事でござりますかね。（下より神職の手に伸のび上る。）

笛の男（おなじく伸上る）手首、足首、腹の真中（我が臍へそを圧おさ

えて反そる）ひゃあ、みしみしと釘の頭も見えぬまで打込んだ。

ええ、血など、ぼたれてはいぬずらか。

神職（彼が言ことばのままに、手、足、胴腹はらを打返して藁人形を翳かざし

見る）血も滴たりよう。：藁も肉のように裂けてある。これ、寄

るまい。（この時人々の立かかるを搔かい払はらう）六根ろっこん清浄しんしょうじよう、

澄むらく、浄きよむらく、清らかに、神に仕うる身なればこそ、こ

の邪よこしまを手にも取るわ。御身おみたちが悪く近づくと、見たばかりで

も筋骨すじぼねを悩み煩わづらうぞよ。（今度は悠然ゆうぜんとして階きざを下る。）

人々は左右に開くあら）荒び、すさみ、濁り汚れ、ねじけ、曲れる、
ねたみおんな 妬 婦め、われは、先ず何処いずこのものじや。

お沢 （もの言わず。）

神職 人の娘か。

お沢 （わずかに頭かぶりふる。）

神職 人妻ひとづまか。

禰宜 人妻にしては、艶つやつや々と所帯しよたいげ気が一向いっこうに見えぬな。ま

た所帯せぬほどの身柄みからとも見えぬ。妾めかけ、てかけ、困かこいものか、こ

れ、靈あらたか験かな神の御前みまえじや、明かに申せ。

お沢 はい、何も申しませぬ、ただ（きれぎれにいう）お恥はずかしう

存じます。

神職 おのれが恥を知る奴か。——本妻正室と言わばまた聞こえる。人のもてあそびの腐れ爛れ汚れものが、かけまくも畏き：
：清く、美しき御神に、嫉妬の願を掛けるとは何事じや。

禰宜 これ、速におわびを申し、裸身に塩をつけて揉んでなりとも、払い浄めておもらい申せ。

神職 いや布気田、(禰宜の名) 払い清むるより前に、第一は神の御罰、神罰じや。御神の御心は、仕え奉る神ぬしがよく

存じておる。——既に、草刈り、柴刈りの女なら知らぬこと、
髪、化粧し、色香、容づくった町の女が、御堂、拝殿とも言わ
ず、この階に端近く、小春の日南でもある事か。土も、風も、
山気、夜とともに身に沁むと申すに。——

神樂の人々。「酔も覚めて来た」「おお寒」など、皆、襟、袖を搔合わす。

神職 ……居眠りいたいて、ものもあろうず、棺の蓋を打つより

も可^{いまわし}忌い、鉄^{かなづち}槌を落し、釘^{くぎ}を溢^{こぼ}す——釘は？……

禰宜 ^{たなごころ}（掌を見す）これに。

神樂の人々、そと集^{つど}い覘^{のぞ}く。

神職 ^{すなわ}即ち神の御^{みこころ}心じゃ——その御心を畏み、次第を以て、順

に運ばねば相成らん。唯今布^ふ氣^げ田^たも申す——三晩、四晩、続けて、森の中に鉄槌の音を聞いたというが、毎夜、これへ参つたのか、これ、明^{あきら}に申せよ。どうじゃ。

お沢 はい、（言い淀^{よど}み、言い淀^{よど}み）今……夜……が、満……願

……でございました。

神職 (御堂を敬う) ああ、神慮は貴い。とうと 非願非礼はうけ給わずとも、俗にも満願と申す、その夕ゆうべに露顕した。明かに邪悪を退け給うたのじや。——先刻も見れば、その森から出て参つて、小兒こどもたちに何か菓子うちのようなものを与えたが、何か、いつも日の中うちから森の奥に潜みおつて、夜ふけを待つて呪詛のろうたかな。

お沢 はい……あの……もうおかくしは申しません。お山の下たにがわの恐しい、あの谿河むらかたを渡りました。村方に、知るべのものがありまして、其処そこから通いましたのでございます。

神楽の人々ささや囁き合う。

禰宜 知っておるかな。

——「なあ。」「よ。」「うむ。」「あれだ。」口々に

後見 何が、お霜しもばあ婆さんの、ほれ、駄菓子屋の奥に、ちらちら

する、白いものがあつけえ。町での御恩人ぞい。恥しい病やまいさあ
つて隠れてござるで、ほつても垣かきのぞきなどせまいぞ、と婆さ

んが言うだでな。

笛の男 かつたい癩かずらか。

太鼓の男 恥しい病ちゆうで。

おかめの面の男 ほんでも、孕はらんだ娘だべか。

禰宜 おなご女子が正しい懐妊は恥ではないのじゃ。それでは、毎晩、

真夜中に、あの馬も通らぬ一本橋を渡ったじやなあ。

道化の面の男 女の一念だて一本橋を渡らいでかよ。ここら奥の
たにがわ 谿河だけれど、ずっと川下で、東海道の大井川より大か
ながら ということ、長柄川の鉄橋な、お前様。川むかいの駅へ行つた県
 庁づとめの旦那どのが、終汽車しまいぎしやに帰らぬわ。予てうわさの、
しゆくば 宿場の娼婦ふんぼりと寝たんべい。唯おくものかと、その奥様ちゆ
 うがや、梅雨つゆぶりの暗やみの夜中よなかに、満水の泥浪どろなみを打つ橋げたさ、
 すれすれの鉄橋を伝つてよ、いや、四つ這いでよ。何が、いま
 産れるちゆう臨月りんげつばら腹で、なあ、流ながれに浸りそうに捌さばき髪がみで這う
 て渡つた。その大な腹おおきずらえ、——夜よがえりのものが見た目で
 は、大でかい鮫鯨あんこうほどな燐火ふとだまが、ふわりふわりと鉄橋の上を渡
 ったいうだね、胸の火が、はい、腹へ入はいつて燃えたんべいな。

仕丁 お言ことばの中なかでありますがな、橋あぶなが危あぶくば、下の谿河いは、巖いわを
 伝つうて渡わたられますでな、お厩うまやの馬うまはいつも流ながを越こします。いや、
 先刻さきどきなどは、落葉らくえつが重おもなり重おもなり、水みづ一杯いっぱいに渦うず巻まいて、飛とび々とび
 の巖いわが隠かくれまして、何処どこを渡わたろうかと見みますうちに、水みづも、も
 みじで、一面いちめんに真紅まっかになりました。おつと……酔よった目めの所せ為い
 ではござりませぬよ。

禰宜 棚村たなむら。(仕丁しぢやうの名な) 御身おみは何なんの話わをするや。

仕丁 はあ、いえ、孕はらみ婦おんなが鉄橋てつきやうを這越はいこすから見みますれば、丑うし
 の刻とき 参まいりが谿河せきの一本橋いっぴんは、気けもなく渡わたると申ますことことで。石
 段だんは目めにつつきます。裏うらづたいの山道やまみちを森もりへ通かよつたに相違あはご
 ざりますまい。

神職 棚村、御身まず、その婦の帯おんなを棄てい。

禰宜 かような婦の、汚らわしい帯を、抱いているという事があ
るものか。

仕丁 わし私が、しか確とおさ圧えておりますればこそで、うかつに棄てます
と、このまま黒蛇くろへびに成つてのた腕り廻りましょう。

禰宜 はしばみ榛な(神職名)様がおつしやる。樹きの枝へなりと掛けぬかい。
仕丁 樹に掛けましたら、なお、ずるずると大蛇だいじやに成つて下り
ます。(一層胸に抱く。)

神職 棚村、見苦しい、森の中へ放ほかし込め。

仕丁、その言ことばの如くにす。――

お沢 あの……(ふるえながら差出す手を、払いのけて、仕丁。

森に行く。帯を投げるとともに飛返る。）

神職 何とした。

仕丁 ずるずるずると巻きましたが、真黒な一幅ひとはばになつて、のろのろと森の奥へ入りました。……大方おおかた、釘を打込みます古杉の根へ、一念で、巻きついた事でござりましょう。

神職 いずれ、森の中において、忌いまわしく、汚らわしき事をいたしおるは必ひつじょう定じやうじや。さて、婦。……今日きようは昼から籠こもつたか。真直まつすぐに言え、御前おんまえじやぞ。

お沢 はい、(間ま)はい、あの、一七日いちしちにちの満願まで……この願ねがいを掛けますものは、唯一目ひとめ、……一度でも、人の目に掛かりますと、もうそれぎりに、願ねがいが叶かなわぬと申します。昨夜ゆうべまでは、獣けもの

の影にも逢あいません。もう一夜ひとよ、今夜だけ、また不思議に満願の夜よといえますと、人に見られると聞きました。見られたら、どうしましょう。口惜くちおしい……その人の、咽喉のど、胸へ喰くいつきましても……

神職 これだ——したたかな婦おんなめが。

お沢 ええ、あのそれが何なにになりました。昼から森にかくれました方が、何がどうでも、第一、人の目にかかりますまいと、ふと思いついたのです。木の葉を被り、草つっぶに突伏しても、すくまりましても、雉きし、山鳥やまどりより、心のひけめで、見つけられそうに思われて、気が気ではありません。かえって、ただの参さんけ詣い人のよういにしております方が、何なんの触さわりもありますまいと、

存じたのでございます。

神職 秘ひしがくしに秘め置くべき、この呪詛のろいの形代かたしろを（藁人形

を示す）言わば軽かるがる々しう身につけおつたは——別に、恐おそれお

多おい神木しんぼくに打込んだのが、森の中にまだ他ほかにもあるからじ

やろ。

お沢 いいえ、いいえ……昨夜ゆうべまでは、打つたままで置きました。

私わたしがちよつとでも立離れます間に——今日はまたどうした事で

ございますか、胸むなさわ騒さわぎがしますまで。……

禰宜 いや、胸騒すさまぎが凄じい、男のろを呪詛のろうて、責せめころ殺ころそうとする

奴が。

お沢 あの、人に見つかりますか、鳥とりけもの獣けものにも攫さらわれます。故

障が出来そうでなりません。それで……身につけて出ましたの
 です。そして……そして……お神ぬし様、皆様、誰方様も——
 憎い口惜しい男の五体に、五寸釘を打ちますなどと、鬼でなし、
 蛇でなし、そんな可恐い事は、思つて見もいたしません。可
 愛い、大事な、唯一人の男の児が煩つておりますものですから、
 その病を——疫病がみを——

「ええ。」 「疫病神。」 村人らまた退る。

神職 疫病神を——

お沢 はい、封じます、その願掛けなんでございますもの。

神職 町にも、村にも、この八里四方、目下疱瘡も、はしかも
 ない、何の疾だ。

お沢 はい……

禰宜 何病じや。

お沢 はい、風邪かぜを酷ひどくこじらしました。

神職 (嘲笑あざわらう) はてな、風に釘を打てば何なんになる、はてな。

禰宜 はてな、はてな。

村人らも引入れられ、小首を傾さぐる状さま、しかつめらし。

仕丁 はあ、皆様、奴やつこが引掛ひっかるでござりましょうで。

——揃そろつて嘲あざり笑う。——

神職 出来た。——掛かると言えば、身みたちも、事件に引掛りじや。

人の一命にかかわる事、始末をせねば済おんまされない。……よくよく深く企たくんだと見えて——見い、その婦おんな、胸むねも、膝ひざも、ひら

しゃらと……（お沢、いやが上にも身を細め、姿の乱れを引つ
 くり引つくり、肩、袖、あわれに寂しく見ゆ）余りと言え
 ば雪よりも白い胸、白い肌、白い膝と思ふたれば、色もなるほ
 ど白々としたが、衣服の下に、一重か、小袖か、真白い衣を
 絡まといている。魔の女め、姿まで調ととのえた。あれに（肱ひじ長く森を指さす）
 形かた代しろを礫はりつけにして、釘を打つた杉のあたりに、如何いかような可けがら
 汚わしい可いまいま忌ましい仕掛しかけがあるうも知れぬ。いや、御身おみたち、
 （村人と禰ね宜ぎにいう）この婦おんなを案内ひつたに引立てて、臨場裁断と申
 すのじゃ。怪しい品しなじな々なかつぽじつて来こられい。証しんぎ拠ぎの上に、
 根ねから詮議せんぎをせねばならぬ。さ、婦、立たてい。

禰宜 立とう。

神職 許す許さんはその上じや。身は——思う旨むねがある。一度社宅から出直す。棚村たなむらは、身とともに参れ。——村の人も婦を連れて、引立ひつたてて——

村人ら、かつためらい、かつ、そそり立ち、あるいは捜し、手近きを搔取かきとつて、鍬くわ、鋤すきの類たぐい、熊手、古箏など思いいに得ものを携う。

後見 先へ立て、先へ立とう。

禰宜 箏で、そのやきもちの頬ほおを敲たたくぞ、立ちませい。

お沢 (急に立たつて、颯さつと森に行く。一同面おもてを見合すとともに追いつて入る。神職と仕丁は反対に社宅—舞台上うえには見えず、あるいは遠く萱かやの屋根のみ—に入いる。舞台空むなし。落葉もせず、常じょう

夜燈やとうの光幽かすかに、梟ふくろう。二度ばかり鳴く。）

神職（威儀いかめしく太刀たちを佩はき、盛装して出いづ。仕丁相従い

床几しょうぎを提ひげ出いづ。神職おごそか。厳おごそかに床几しょうぎに掛かる。傍かたわらに仕丁つかばい踞居つくだいて、

棹尖さおさきに劍けんの輝けんける一流の旗はたを捧ささぐ。——別に老いたる仕丁。

一人。一連の御幣ごへいと、幣へいゆいたる袖そでを合あせ、裾すそをずらし、打うち

お沢（悄しょうぜん然ぜんとして伊達卷だてまきのまま袖そでを合あせ、裾すそをずらし、打うち

うなだれつつ、村人らに囲いまれ出いづ。引添ひきえる禰宜ねいの手に、獸けもの

の毛皮けがしにて、男おとこ枕まくらの如ごとくしたる包つつみ一つ、怪あやしき紐ひもにてかがり

たるを不気味ぶきみらしく提さげ来きり、神職の足近く、どきと差置さく。）

神職 神のおおせじや、婦おんな、下したにおれ。——誰たぞ御灯みあかしをかかけ

い——（村人一人、燈とうを開ひらく。灯ひにすかして）それは何なにだ。穿ほ

出したものか、ちびりと濡れておる。や、（足を爪立つ）蛇が絡んだな。

禰宜 身どもなればこそ、近う寄つても見ましたれ。これは大木の杉の根に、草にかくしてござりましたが、おのずから樹の雫のしたたります茂ゆえ、びしやびしやと濡れております。村の衆は一目見ますと、声も立てずに遁ぎようとなりました。あの、円肌で、いびつづくつた、尾も頭も短う太い、むくりむくり、ぶくぶくと横にのたくりまして、毒気は人を殺すと申す、可恐く、気味の悪い、野槌という蛇そのままの形に見えました。なれども、結んだのは生蛇ではござりませぬ。この悪念でも、さすがは婦で、包を結えましたは、継合わせた蛇の脱

殻からでござりますわ。

神職 野槌か、ああ、聞いても忌いまわしい。……人目に触れても近

寄せまい巧たくみじやろ、企たくんだな。解たけ、解たけ。

禰宜むじな（解きつつ）山犬か、野狐か、いや、この包みました皮は、
貉むじならしうござります。

一同目を注ぐ。お沢はうなだれ伏す。

神職 鏡——うむ、鉄かなわ輪——うむ、蠟ろうそく燭——化粧道具、紅べに、白お

粉しろい。おお、お鉄はぐろ漿、可いや厭やなにおいじゃ。……別に鉄かなづち槌、う

む、赤あかさび錆、黒錆、青錆の釘くぎ、そろそろと……青い蜘蛛くも、紅あかい

守宮やもり、黒とかけ蜥蜴の血を塗ぬったも知れぬ。うむ、（きらりと佩はい刀とう

を抜きそばむると斉ひとしく、藁人形けものをその獣の皮けものに投なぐ）やあ、

もはや陳ちんじまいな、婦おんな。——で、で、で先ず、男は何ものだ。

お沢 (息の下にて言う) 俳優やくしやです。

——「俳優やくしや、」 「ほう俳優。」 「俳優。」と口々に言
い継ぐ。

神職 何なんじや、俳優やくしや?……——町へ参つてでもおるか。国のも
のか。

お沢 いいえ、大阪に——

禰宜 やけに大胆ぬかに吐すわい。

神職 おのれは、その俳優やくしやの妾めかけか。

お沢 いいえ。

神職 聞けば、聞けば聞くほど、おのれは、ここだくの邪淫じゃいんを

侵す。言うまでもない、人の妾となつて汚れた身を、こてぬりう 鍔塗上

わぬり 塗に汚しおる。あまつさえ、身のほどを弁えわきまずして、百四、

五十里、二百里近く離れたままで人を咒詛のろう。

仕丁 さが その、その俳優やくしやは、今大阪で、名は何と言うかな。姉様あね。

神職 わざわい 退れ、棚村。恚る場合に、身らが、その名を聞き知つても、

禍は幾分か、その呪詛のろわれた当人に及ぶと言う。聞くな。聞け

ば聞くほど、何が聞くほどの事もない。——淫奔いんぼん、汚濁、し

ばらくの間も神の御前みまえに汚らわしい。茨の鞭いばらむちを、しやつしろあの白

脂ぶらの臀しりに当てて石段から追落おいおとそう。——が呆あきれ果てて聞

ぞ、婦おんな——その釘を刺した形代かたしろを、肌いねむに当てて居睡いねむつた時

の心持は、何とあつた。

お沢 むずむず痒うございました。

禰宜 何じや藁人形をつけて……肌が痒い。つけつけと吐す事よ。

これは気が変になったと見える。

お沢 いいえ、夢は地獄の針の山。——目の前に、茨に霜の降り

ましたような見上げる崖がありまして、上れ上れと恐しい二つ

の鬼に責められます。浅ましい、恥しい、裸身に、あの針の

ざらざら刺さるよりは、鉄棒で挫かれないと、覚悟をしてお

りましたが、馬が、一頭、背後から、青い火を上げ、黒煙

を立てて駈けて来て、背中へ打つかりそうになりましたので、

思わず、崖へころがりますと、形代の釘でございましょう、

針の山の土が、ずぶずぶと、この乳へ……脇の下へも刺りまし

たが、ええ、痛いのなら、うずくのなら、骨が裂けても堪えま
 す。唯くわツと身うちがほてつて、その痒いこと、むず痒さに、
 懐中へ手を入れて、うっかり払いましたのが、つい、こぼれ
 て、ああ、皆さんのお目に留ったのでございます。

神職 はて、しぶとい。地獄の針の山を、痒がる土根性じや。

茨の鞭では堪えまい。よい事を申したな、別に御罰の当てよう
 がある。何よりも先ず、その、世に浅ましい、鬼畜のありさま
 を見しよう。見よう。——御身たちもよく覚えて、お社近
 い村里の、嫁、嬢々、娘の見せしめにもし、かつは郡へも町
 へも触れい。布気田。

禰宜 は。

神職 じたばたするなりや、手取り足取り……村の衆にも手伝わ
せて、その婦の上衣を引剥げ。髪を捌かせ、鉄輪を頭に、九つ
か、七つか、蠟燭を燃して、めらめらと、蛇の舌の如く頂かせ
ろ。

仕丁 こりや可い、可い。最上等の御分別。

神職 退れ、棚村。さ、神の御心じや、猶予うなよ。

——渠ら、お沢を押し取込めて、そのなせる事、神職の
言の如し。両手を振り、腰を押し、真正面に、看客
にその姿を露呈す。——

お沢 ヒイ……（歯を切りて忍泣く。）

神職 いや、蒼ざめ果てた、がまだ人間の婦の面じや。あからさ

まに、邪慳じやくけん、陰悪の相を顕わす、それ、その般若はんんにや、鬼女きじよの面を被せる。おお、その通り。鏡も胸に、な、それそれ、藁人形、片手に鉄槌。——うむその通り。一度、二度、三度、ぐるぐると引廻したらば、可よし。——何なんと、丑うしの刻ときの咒詛のろいの女魔によまは、一本ぼ歯たかの高下駄げたを穿はくと言うに、些ちとももの足りぬ。床几しようぎに立たせろ、引上げい。

渠かれは床几だきを立つ。人々お沢おを抱だすくめて床几のに載す。黒髪高く乱れつつ、一ひとつ本の杉こずえの梢さばに火を捌えんびき、艶媚えんびにして嫋娜しなやかなる一個きじよの鬼女きじよ、すつくと立つ——

お沢お ええ！ 口惜くやしい。(殆ほとんど瘵けい癩れん的てきに丁ちようと鉄槌てつちを上げて、
面斜おもてめに牙白きばく、思おもわず神職かみを凝視ねいしす。)

神職 (魔を切るが如く、太刀たちを振ふりひらめかしつつ後退あとずさる)し

たたかな邪氣あくきじや、古今の悪氣あくきじや、激はげしい汚濁わづわいじや、禍わざわいじや。

たちま

(忽たちまち心こころづきて太刀たちを納おさめ、大おほいなる幣はらを押取おとつて、飛とび蒐かかる)

おんかみ

御神おんかみ、祓はらいたまえ、浄じやうめさせたまえ。(黒髪くろかみのその呪詛のろいの火

を払い消けさんとするや、かえつて青あおき火か、幣はらに移うつりて、めらめ

らと燃も上あり、心火こころと業火ごうかと、もの凄すごく立たち累かさなる)やあ、消けせ、

消けせ、悪火あくびを消けせ、悪火あくびを消けせ。ええ、埒らちあかぬ。床ゆかぐるみに

蹴落けおとさぬかいやい。(狼うろたえ狽たえて叫こゑぶ。人々ひと床几とことともに、お沢

を押し落おしおとし、取包くずおんで蠟燭ろうそくの火かを一度いちどに消けす。)

お沢 (崩折くずおれて、倒たふれ伏ふす。)

神職 (吻ほっと息いきして)——千慮せんりょの一失いちじつ。ああ、致いたしようを過あやまつた。

かえつて淫邪の鬼の形相ぎようそうを火で明かに映し出した。これでは御罰ごばつのしるしにも、いましめにもならぬ。陰惨忍刻いんこんの趣は、元来、この婦おんなにつきものの影であつたを、身ほどのものが気付かなんだ。なあ、布気田ふげた。よしよし、いや、村の衆しゆ。今度は鬼女、般若の面のかわりに、そのおかめの面を被せい、丑うしの刻ときま参いりの装束しようぞくを剥はぎ、素裸すだかにして、踊らせる。陰を陽に翻すのじや。

仕丁 あはだかおどりの裸踊、有難い。よい慰み、よい慰み。よい慰み！

神職 退さがれ、棚村。慰みものではないぞ、神の御罰じや。

禰宜 踊りましようかな。ひひひ。(ニヤリニヤリと笑う。)

神職 何はさ、笛、太鼓で囃はやしながら、両手を引張ひっぱり、ぐるぐる廻

しに、七度まで引廻して突放せば、裸体の婦だ、仰向けに寝はせまい。目ともろともに、手も足も舞踊ろう。

「遣るべい、」 「遣れ。」 「悪魔退散の御祈祷。」 村人は饒舌り立つ。太鼓は座につき、早や笛きこゆ。その二、三人はやにわにお沢の衣に手を掛く。――

お沢 ああ、まあ、まあ。

神職 構わず引剥げ。裸体のおかめだ。紅い二布……湯具は許せよ。

仕丁 腰巻、腰巻……（手伝いかかる。）

禰宜 おこしなどというのじゃ。……汚れておろうかの。

後見 この婦なら、きれいでがすべい。

お沢 (身悶えみもだしながら) 堪忍して下さいまし、堪忍して下さい

まし、そればかりは、そればかりは。

神職 罷成まかりならん！ 当社とうやしろの掟おきてじゃ。が、さよういたした上

は、追放おっぱなして許して遣る。

お沢 どうぞ、このままお許し下さいまし、唯お目の前を離れま

したら、里へも家へも帰らずに、あの谿河たにがわへ身を投げて、死しん

でお詫わびをいたします。

神職 水は浅いわ。

お沢 いいえ、あの急な激しい流れ、巖いわに身体からだを砕いても。――

ええ、情なさけない、口惜くちおしい。前刻さつきから幾度いくたびか、舌を噛かんで、舌

を噛んで死のうと思つても、三日、五日、一目も寝ぬせいか、

一枚も欠けない歯が皆弛ゆるんで、噛切かみきるやくに立ちません。舌も縮くちびるんで唇を、唇を噛むばかり。（その唇より血を流す。）

神職 いよいよ悪鬼の形ぎようそう相そうじゃ。陽を以つて陰を払う。笛、太鼓、さあ、囃はせ。引立てろ。踊らせい。

とりどりに、笛、太鼓の庭につきたるが、揃そろつて音ねを入いる。

お沢 （村人らに虐しいたげられつつ）堪忍しのね、堪忍しの、堪忍しのして、よう。
堪忍……あれえ。

からりと鳴つて、響ひびくと斉ひとしく、金色こんじきの機はたの梭ひ、一具
宙とびおを飛落とつ。一同吃きつきよう驚おどす。社殿しやでんの片かた扉とびら、颯さつと開ひらく。

巫女 きぎはしは 馳せ下る。髪は姥子おばこに、鼠小紋ねずみこもんの紋着もんつき、胸に手

箱を掛けたり。馳せ出いでつつ、その落ちたる椀を取つて押おしいた

戴だき、社頭に恭礼し、けいひつを掛く) しい、……しい……

しい。……

一同 茫然ぼうぜんとす。

御堂正面みどうの扉、両方にさらさらと開く、赤く輝きたる光

燦然さんぜんとして漲る裡みなぎうちに、秘密きぼうの境は一面の雪景せつけい。この

時ちらちらと降りかかり、冬牡丹ふゆぼたん、寒菊かんぎく、白玉しらたま、

乙女椿おとめつばきの咲満さきみてる上に、白雪しらゆきの橋、奥殿おくどのにかかりて

玉虹ぎよつこうの如ごときを、はらはらと渡り出いづる、気高けだかく、世

にも美しき媛神ひめがみの姿見ゆ。

媛神 (白がさねして、薄紅梅に銀のさや形の衣、白地金欄

の帶。髻結いたる下髪さげがみの丈たけに余れるに、色紅くれないにして、たとえ

ば翡翠ひすいの羽はねにてはけるが如きひとすじ一条の征矢そやを、さし込みにて前ま

簪えかんざしにかざしたるが、瓔珞ようらくを取つて掛けし襷たすきを、片はずし

にはずしながら、衝つと廻廊の縁いに出いづ。凜りんとして) お前たち、

何をする。

—— (一同ものも言い得ず、ぬかずき伏す。少しおくれで、童ど

男うだんと童女どうじよと、ならびに、目一つの怪しきが、唐輪からわと切きりかむ

禿ろにて、前なるは錦にしきの袋に鏡を捧げ、後あとなるは階きざはしを馳くたせ下り、

巫女みこの手より梭ひを取り受け、やがて、欄干らんかん擬宝珠ぎぼうしゆの左右に

控たてなう。媛神、立直たてなりて) —— お沢さん、お沢さん。

巫女 (取次ぐ) お女中、可恐い事はないぞな、はばかり

多や、おほ畏けれど、かしこお言葉ぞな、あれへの、まえおん前への。

お沢 はい——はい……

媛神 まだ形代かたしろを確り持つておいでだね。手がしびれよう。姥うば、

預つてお上げ。(巫女受取つて手箱に差置く)——お沢さん、

あなたの頼みは分りました。一念は届けて上げます。名高い俳や

優くしやだそうだけれど、わたし私は知りません、どこ何処に、いま何をして

いますか。

巫女 今日きよう、今夜——唯今の事は、海山うみやま百里も離れまして、こ

の姉あねさまも、知りますまい。姥が申上げましょう。

媛神 聞きましょう——お沢さん、その男の生命いのちを取るのだね。

お沢 今さら、申上げますも、
 空そら 恐おそろ しょうごごいます、空恐し
 う存じあげます。

媛神 森の中でも、この場でも、私わたしに頼むのは同じ事。それとも
 思い留とまるのかい。

お沢 いいえ、私わたしの生命いのちをめされましても、一念だけは、あの一
 念だけは。——あんまり男の薄情さ、大阪へも、追おい継すがつて参
 りましたけれど、もう……男は、石とも、氷とも、その冷たさ
 はありません。口も利きかせはいたしません。

巫女 いやみ、つらみや、怨うらみ、腹立ち、怒おこつたりの、泣きつい
 たりの、口惜くやしがったり、武むしやぶりついたり、胸むな倉ぐらを取つ
 たりの、それが何なんになるものぞ。いい女が相そう好こう崩くずして見つと

もない。何も言わずに、心に怨んで、薄情ものに見せしめに、命の呪詛のろいを、貴女様あなたへ願掛がんがけさしやつた、姉さんあねは、おお、お怜悧りこうだの。いいお娘だ。いいお娘だ。さて何とや、男の生命いのちを取るのが、いまたちどころに殺すのか。手を萎なやし、足を折り、あの、昔田之助たのすけとかいうもののように胴中どうなかと顔ばかりにしたいのかの、それともその上、口も利かせず、死んだも同様にという事かいの。

お沢 ええ、もう一層いっそ（屹きつと意気組む）ひと思いに！

巫女 お姫様、お聞きの通りでござります。

媛神 男は？

巫女 これを御覧遊ばされまし。（胸の手箱を高く捧げ、さし翳かざ

して見せ参らす。)

媛神 花の都の花の舞台、咲いて乱れた花の中に、花の白拍子しらびょうしを舞っている……

巫女 座頭俳優が所作事しよさごとで、道成寺どうじょうじとか、……申すので

ござります。

神職 ははっ、ははっ、恐れながら、御神おんかみに伺い奉る、伺い奉る……つつし謹みもう白す。

媛神 (——無言——)

神職 恐れながら伺い奉る……御神慮におかせられては——かしこ畏くも、これにて漏れ承りまする処におきましては——これなる悪あ女くじよの不届ふとどきな願ねがの趣おもむき……趣をお聞き届け……

媛神 肯ききます。不届とは思いません。

神職 や、この邪よこしまを、この汚けがれを、おとりいれにあい成りまするか。

その御ごりよう霊みたま、御魂、御神体は、いかなる、いずれより、天降あまくだ

らせます。……

媛神 石垣を堅めるために、人ひと柱ばしらと成つて、活いきながら壁に

塗られ、堤つつみを築くのに埋うずめられ、五穀のみのりのための犠いけにえ牲

として、俎まないたに載せられた、私わたしたち、いろいろなお友だちは、高

い山おおき、大な池、遠い谷にもいくらもありません。——不断私わたしを何

と言つてお呼びになります。

神職 はッ、白寮はくりよう権現ごんげん、媛神ひめがみと申し上げ奉る。

媛神 その通り。

神職　そ、その媛神におかせられては、直ぐなること、正しきこと、明かに清らけきことをこそお司り遊ばさるれ、恚る、邪に汚れたる……

媛神　やみの夜は、月が邪だというのかい。村里に、形のありなしとも、悩み煩らいのある時は、私を悪いと言うのかい。

神職　さ、さ、それゆえにこそ、祈り奉るものは、身を払い、心を払い、払い清めましての上に、正しき理、夜の道さえ明かなるよう、風も、病も、悪きをば払わせたまえと、御神の御前に祈り奉る。

媛神　それは御勝手、私も勝手、そんな事は知りません。

神職　これは、はや、恐れながら、御声、み言葉とも覚えませ

ぬ。不肖はしばみ榛さだ 貞まこと 臣おみ、徒いたずらに身みすぎ、口くちすぎ、世よの活い計けいに、

神職は相勤あいきんめませぬ。刻苦こくこ勉べん励れい、学問がくもんをも仕つかまり、新あらたしき神道しんどうを

相あ学がくび、精しょう進じん潔けつ齋さい、朝あさ夕ゆふの供物くもつに、魂たまの切きり火び打うつて、御み

前まえにかしかししずずきき奉ほうる……

媛神わたしちつ 私は些ちとも頼たのみはししません。こころころろざしは受うけますが、三さん

宝たからにのつたものは、あとで、食くべるのは、あなあたた方がたではあり

ませんか。

神職 えつ、えつ、それは決けつして正ただしき神かみのお言こと葉はではない。

(わなわななななききななががら八は方ほうを礼らい拜はいす。禰ね宜ぎ、仕し丁ちやう、同どうじく背そむ

ける方かたを礼らい拜はいす。)

媛神よこしま 邪よこしまな神かみのすするるここととを御ご覧らん——いま目まのああたたりりに、悪あく魔ま、鬼おに

畜ののしと罵ののしらるる、恋うらみの怨のろいの呪のろいの届しるしく驗しるしを見せよう。(静しずに階ぎざを

下おりてお沢いよに居よ寄り) ずっとお立ち——私わたしの袖そでに引添ひうて、

(巫女みこに) 姥うば、弓ゆみをお持ちか。

巫女 おお、これに。(梓あずさの弓ゆみを取り出す。)

媛神 (お沢いよに) その弓ゆみをお持ちなさい。(簪かんざしの箭やを取とつて授まけ

つつ) 楊よう 弓きゅうを射やるよう——釘くぎを打うつて呪のろうのは、一念

の届とくのに、三月みつぎ、五月いつつき、三年ねん、五年ごねん、日ひと月つきと暦こよみを待まちたね

ばなりません。いま、見みるうちうちに男おとこの生命いのちを、いいかい、心こころを

よく静しずめて。——唐輪からわ。(女むすめの童わらわを呼よぶ) その鏡かがみを。(女むすめの童

は、錦にしきをひらく。手てにしつつ)——的まと、的まと、的まと、的まとです。あれを御

覽らん。(空そらさまに取とつて照てらすや、森しん々しんたる森しんの梢こずえ——処ところに、

赤き光朦朧もうろうと浮き出いづるとともに、 TENT ツツン、 TENT ツツン、
 ツン、 下方したかたかすめて遙はるかにきこゆ）……見えたか。

お沢 あれあれ、彼処あそこに——憎らしい。ああ、お姫様。

媛神 ちゃんとお狙ねらい。

お沢 畜生ちくしよう！（切つて放つ。）

一陣はやの迅はやき風、一同聳しょうもく目し、悚しょうりつ立す。

巫女 お見事や、お見事やの。（しやがれた笑わらい）おほほほほ。

（凄すげく笑う。）

吹ふつきのる風の音凄すげまじく、荒波の響なきを交う。舞台暗黒。

少時しばらくして、光さす時、巫女。ハタと藁人形なげうを擲なつ。その

位置の真上より振袖落ち、紅くれないの裙すそ翻り、道成寺の白拍子

の姿、一たび宙に流れ、きりきりと舞いつつ 真まつさかさ 倒かさに
 落つ。もとより、仕掛けもの造りものの人形なるべし。
 神職、村人ら、立騒ぐ。

お沢 ああ、どうしましょう、あれ、（その胸、その手を捜ろう
 として得ず、空むなしく搔か搜さぐるのみ。）

媛神 それは幻、あなたの鏡に映るばかり、手に触さわるのではあり
 ません。

お沢 ああ唯貴女のお姿ばかり、暗おもい思いは晴はれました。媛神様、
 お嬉ひしう存ぞんじます。

丁々坊 お使いのもの！（森の梢に大だい音おんあり）——お髪ぐしの御矢おんや、

お返し申し上ぐる。……唯今。——（梢より先ず呼びて、忽ち枝より飛び下る。形は山賤の木樵にして、翼あり、面は烏天狗なり。腰に一挺の斧を帯ぶ）御矢をばそれへ。——
 （女の童。階を下り、既にもとにつつまたる、錦の袋の上を受く。）

媛神 御苦勞ね。

巫女 我折れ、お早い事でござりましたの。

丁々坊 瞬く間というは、凡そこれでござるな。何が、芝居は、

おやおま 大山一つ、柿の実つたような見物でござる。此奴、（白拍子）

べっぴん 別嬪かと思えば、性は毛むくじやらの漢が、白粉をつけて

は 勿ねるであつた。

巫女 何を、何を言うぞいの。何ごとや——山にばかりおらんと世の中を見さっしやれ、人が笑いますに。何を言うぞいの。

丁々坊 何か知らぬが、それは措おけ。はて、何とやら、テンツル

テンツルテンツルテンか、鋸のこぎりで樹をひくより、早はや間な腰を振ふり

廻わいて。やあ。(不器用千万なる身ぶりにて不状ぶざまに踊りなが

ら、白拍子のむくろを引ひん跨またぎ、飛越え、匆はねこ越え、踊る)おも

えばこの鐘うらめしやと、竜頭りゆうずに手を掛け飛ぶぞと見えしが、

引ひっかついでぞ、ズーンジャンドンドンジンジンジリリリズムジ

ンデンズンズン(匆はねあ上りつつ)ジャーン(忽たちまち、ガーン、ど

ど凄すさまじき音す。——神職ら腰をつく。丁々坊ちようちようぼう、落着き済まし

て)という処じや。天井から、釣鐘つりがねが、ガーンと落ちて、パ

イと白拍子が飛込む拍子に——御矢が咽喉へ刺つた。(居ずま
 いを直す)——ははッ、姫君。大釣鐘と白拍子と、飛ぶ、落つ
 る、入違いに、一矢、速に抜取りまして、虚空を一飛びに飛
 返つてござる。が、ここは風が吹きぬけます。途すがら、遠州
 灘は、荒海も、颶風も、大雨も、真の暗夜の大暴風雨。洗
 いも拭いもしませずに、血ぬられた御矢は浄まつてござる。そ
 のままにお指料。また、天を飛びます、その御矢の光りを
 もつて、沖に漂いました大船の難破一艘、乗組んだ二百あま
 りが、方角を認め、救われまして、南無大権現、媛神様と、
 船の上に黒く並んで、礼拝恭礼をしましてござる。——御利
 益、——御奇特、祝着に存じ奉る。

巫女 お喜びを申し上げます。

媛神 (梢を仰ぐ) ああ、空にきれいな太白星たいはくせい。あの光りにも

恥かしい、……私わたしの紅い簪あかかんざしなんぞ。……

神職おんかみ 御神、かけまくもかしこき、あやしき御神、このまま生

命のちを召さりようままよ、遊ばされました事すべて、正しき道で

ござりましょうか——榛はしばみ貞臣さだおみ、平ひらに、平ひらに。……押して

伺いたてまつる。

媛神 存じません。

禰宜 ええ、御神おんかみ、御神。

媛神 知らない。

——「平ひらに一同、」 「一同偏ひとえに、」 「押して伺い奉る、」

村人らも異口同音にやや迫りいう――

巫女 知らぬ、とおつしやる。

神職 いや、神々の道が知れませいで、世の中は東西南北を相失いまする。

媛神 廻つてお歩ありきなさいまし、お沢さんをぐるぐると廻したように、ほほほ。そうして、道の返事は――ああ、あすこでしている。あれにお聞き。

「のりつけほうほう、ほうほう、」――梟ふくろう鳴く。

神職 何、あの梟ふくろどり鳥をお返事とは？

媛神 あなた方がたの言う事は、私わたしには、時々あのように聞こえます。よくお聞きなさるがよい。

——梟、頻しきりに鳴く。「のりつけほうほう」——

老仕丁

のりつけほうほう。のりたもうや、つげたもうや。あや

しき神の御おんこえ声じや、のりつけほうほう。(と言うままに、真ま

つさき

のりうつ

先に、梟に乗憑のりうつられて、目の色あやしく、身ぶるいし、羽は

ばたき

搏ばたきす。

——これを見詰めて、禰宜と、仕丁と、もろともに、の

り憑つかれ、声を上ぐ。——「のりつけほう。——のりつ

けほうほう、ほう。」

次第に村人ら皆憑うつらる——「のりつけほうほう。ほうほ

う。ほうほう」——

神職

言語道断、ただ事ごとでない、一方ひとかたならぬ、夥おびただ多しい怪異

じや。したたかな邪氣じや。何が、おのれ、何が、ほうほう：
：

（再び太刀^{たち}を抜き、片手に幣^{あいた}を振り、飛^{とび}より、煽^{あお}りかかる人々を激しくなぎ払い打ち払う間、やがて惑乱^{あいた}し次第^{あいた}に昏迷^{こんめい}して
——ほうほう。——思^{おも}わず袂^{たもと}をふるい、腰^{こし}を刎^はねて）ほう、ほう、のりつけ、のりつけほう。のりつけほう。〔備考、この時、看^{かん}客^{かく}あるいは哄^{こう}笑^{しょう}すべし。敢^{あえ}て煩^{わづ}わしとせず。〕（恚^{いか}くして、一人一人、枝々より梟^うの呼び取る方^{ほう}に、ふわふわとおびき入れらる。）

丁々坊^{ていせいぼう} ははははは。 （腹^{かか}を抱^{かか}えて笑う。）

媛神^{ひめがみ} 姥^{うば}、お客^{おきゃく}を帰^{かへ}そう。あらしが来^こそうだから。

巫女 御意ぎよゐ。

媛神 蘆毛あしげ、蘆毛。——(駒こま、おのずから、健かに、すとすと出

づ。——ほうほうのりつけほうほう——と鳴きつつ来るきた。媛神。
軽く手を拍うつや、その鞍くらに積めるままなる蕪かぶ、太根だいこ、人參にんじんの
類るい、おのずから解けてばらばらと左右に落つ。駒また高らかに
鳴く。のりつけほうほう。——)

媛神 ほほほほ、(微笑ほほえみつつ寄りて、蘆毛の鼻頭はなづらを軽く拊うつ)

何だい、お前まで。(駒こま、高たかい嘶いななきす)「——この時、看客
の笑しょうせい声あるいは静まらん。然しからんには、この戯曲なかば成
功たるべし。」——お沢さん、疲れたろう。乗っておいで。姥うば
は影に添って、見送ってお上げ——人里まで。

お沢 お姫様。

巫女 もろともにお礼をば申上げます。

蘆毛は、ひとりして鱗爪ひづめ軽く、お沢に行く。

丁々坊 ははは、この梟、羽を生せ。はや（戯れながら——熊手にか

けて、白拍子の軀むくろ、藁人形、そのほか、釘、獣皮などを搔かき浚さら

う。）

巫女 さ、このお娘こ。——貴女様に、御挨拶ごあいさつ申上げて……

お沢 （はつと手をつかう）お姫様。草刈くさかり、水汲みずくみいたします。

お傍そばにいと存じます。

媛神 （廻廊に立つ）——私わたしの傍そばにおいでだと、一つ目のおぼけ

に成ります、可恐こわい、可恐こわい、……それに第一、こんな事、二

度とはいけません。早く帰って、そくさいにおくらし。——駒に乗るのに坐っていないで、遠慮のう。

お沢 (涙ぐみつつ) お姫様。

巫女 丁どや——丑の上刻ぞの。(手綱を取る。)

媛神 (鬢に真白き手を、矢を黒髪に、女性性の最も優しく、

なよやかなる容儀見ゆ。梭を持てるが背後に引添い、前なる女

の童は、錦の袋を取出で下より翳し向く。媛神、半ば簪して、

その鏡を視る。丁々坊は熊手をあつかい、巫女は手綱を捌きつ

つ——大空に、笙、篳篥、幽なる楽。奥殿に再び雪ふる。

まきおろして) ——

——幕——

青空文庫情報

底本：「海神別荘 他二篇」岩波文庫、岩波書店

1994（平成6）年4月18日第1刷発行

2001（平成13）年1月15日第4刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十六卷」岩波書店

1942（昭和17）年10月15日第1刷発行

初出：「文藝春秋」

1927（昭和2）年3月

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2007年4月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

多神教

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>